

子どもの本

研究会

私の一冊

『新編 銀河鉄道の夜』宮沢賢治著（新潮文庫、一九八九年）

森 正人

宮沢賢治のことは、「雨ニモ負ケズ」の詩の作者として、小学校三年生か四年生の時、担任の先生の紹介で初めて知った。それをきっかけに「セロ弾きのゴーシュ」「注文の多い料理店」などを読んだ。『銀河鉄道の夜』を読んだのはそれより上の学年であろう。いずれも学校の図書室から借り出した。その頃読みふけて少年の夢や好奇心を満たしてくれていた、『三銃士』『十五少年漂流記』『怪人二十面相』などはまったく傾向の異なる作品で、強い抵抗感を覚えたものである。賢治の独特の文体にもなじめなかった。しかも、その時、私は物語の展開に不自然なところがあると感じたのである。読み返してみても、どこかじつまが合わない。

というわけで、この作品が私に残したのは、何だかよく分からないという印象であった。ただし、この作品が湛えている悲哀は側々と伝わってきた。この世に生きていくかぎり、人は孤独や苦悩から逃れることはできないと気づかせてくれたのである。しかし、私はすぐにまた胸躍らせる冒険小説や探偵小説に戻っていった。

じつは、この作品の展開にじつまの合わないところがあると感じたのには理由があった。ずっと後になって知ることになるが、この作品には清書原稿がなく、未定稿から本文を作成しなければならぬからである。当時私が読んだ本文は、原稿からの本文整理に不適切なところを含んでいたというわけである。たとえば、岩波文庫、旧版の角川文庫等の本文では、「セロのような（う）ごう」とした声「不思議な低い声」が突如挟みこまれ、夢から覚めたジョバンニにブルカニロ博士が「実験」のことを告げるが、これらは作品の他の部分とうまく照応しない。「新編」と付した現在の新潮文庫をはじめとして、今日一般には、これらを最終稿の前段階の部分と判断して除き去った本文が採用されている。賢治の原稿についての研究の成果である。

ブルカニロ博士の饒舌な説明や教訓は、読み解きたいこの作品の解説とはなっているものの、読者の読みを制約して、かえって作品から豊かさを奪ってしまうように思う。作品の豊かさは難解さに堪える読者が生み出す。

（尚綱大学学長・熊本子どもの本の研究会 会員）